

ドクター Henrique

医療と家族に捧げる人生



QAMANI

ドクター Henrique

医療と家族に捧げる人生



この物語を守り続ける家族へ

そしてまだそれらを発見していない人たちへ。

概要

読者へ 5

プロローグ・木の時代 6

パートⅠ・石と海 7

1 彼の中にあった家 8

2 人生の二つの時期をつなぐ18日間 11

3 学校のドア 14

パートⅡ・仕事も家も 17

4 ケアすることを学び、教えることを学ぶ 18

5 まだ知られていないことに直面して 21

6 Lúcia、暮らしの中心に 24

7 門を通して到着したお父さん 27

パートⅢ・思い出の家 31

8 マル・デ・ラス・パンパスの道 32

9 スペイン、再び 35

10 孫たちが知っていること 39

パートⅣ・まだ明日がある 43

11 家の大きさが変わったとき 44

12 続く日々は 47

エピローグ・後から来る人のために 50

時間の中での人生 51

家族の声 52

読者へ

人生は、人が自分自身について語ることに適合するものではありません。それは、壁の向こう側の声を認識する息子、新聞の匂いで祖父を連想する孫娘、道路での別れを今でも覚えている親戚の中にも保存されています。

本書はこれらの視点をまとめたものです。 Henrique は、彼のスペインでの子供時代、アルゼンチンへの到着、そして医学の物語を語ります。彼の子供たち、孫娘、孫、義理の娘、叔父、いとこたちは、置き忘れたスーツケース、水泳のレッスン、繰り返しのゲーム、誰かが病気になったときに届いたスープなど、彼が提示することを選ばなかったであろうシーンを追加します。 Lúciaは、仕事、おもてなし、個性からなる独自の存在感でこれらの思い出に浸透します。

このデモンストレーションは、実際の家族の物語から Qamani で作成された伝記を応用しています。 Henrique と彼の家族は架空の人物です。名前、詳細、写真が再現されました。画像はAIによって生成されます。

この本は、人生で語られる物語にふさわしく、これから起こる可能性のあることについてのスペースを残して終わります。

木の時代

Henrique は、松の木が育つまでにどれほど時間がかかるのかを知りたがりました。祖父は、30年、おそらく50年は必要だと答えました。

孫はまだ小さかった。彼はスペインに戻り、祖父が土地を耕すのに同行し、村でしばらく過ごした。あの男はすでに長生きしていた。 Henrique さんは、祖父の年齢を考えると締め切りが奇妙だと感じました。

答えは残った。

「私は自分のために植えているわけではありません。」

数十年後、そのエピソードを振り返ったとき、Henrique さんはまだその説明を覚えていました。「木はこれから来る人々のためのものだった」ということです。あなたの祖父はあなたより長く働きました。その仕事の意味をなすために、私がそこにいる必要はありませんでした。

同じ訪問で、別の贈り物がありました。出発する前に、彼の祖父は引き出しを開け、古い版の ガリシア詩選集 を手渡しました。 Henrique の記憶では、本は緑色でした。彼は、別の忍耐を必要とするものを持って海を渡った。それは、すべてを理解するわけではなく、また読むという、本を読むことだった。

数年後、ベッドサイドには学生がおり、子供たちは職業を選択し、孫は自分の興味を発見するでしょう。 Henrique が教えた多くのことは、彼の存在の外でも起こり続けるでしょう。しかし、彼がそれらを送信する前に、彼自身がそれらを受信していました。

松の木の物語は、私たちの前に誰かが働いていた場所に到着するという、この良い恩義についても語っているため、力強いです。

Henriqueを見つけるには、石の家に戻る必要があります。

パートⅠ

石と海

スペイン、交差点と形成期。



Henrique 子供、両親、姉妹と。

彼の中にあつた家

特別な場所を尋ねられたとき、Henrique はいくつか選ぶことができます。ロサリオのオフィス、海の家、彼が訪れた都市があります。彼はスペインにある祖父の家を選びました。

彼は悲しいときや怒ったときにそこに行くと言います。物理的に遠いかもしれません。記憶は彼を川と家に連れて行きます。この往復のチケットを購入する必要はありません。

「そこはそういう場所、避難所なんです。」

Henriqueは1942年にルーゴに近い田舎で生まれました。村は小さく、家族はお互いに知り合いでした。子供時代は親戚、土地、水、肉体労働に囲まれていたように見えます。その家は石でできていました。その世界を思い出しながら、彼は石油と炭化物のランプ、電気とアスファルトの不在について話します。そこから離れている距離は、海の距離だけではありません。それは、まったく異なる生活様式の間の距離でもあります。

この家族では、大工仕事が世代から世代へと受け継がれてきました。彼の祖父、叔父、父親は木工の仕事をしていました。Henrique は振り返って、自分自身も含めて一連の流れを要約しています。彼も大工になっていたかもしれません。医学はまだ未来を整理していませんでした。

その当初からの仲間の一人は、年齢をほとんど信じないほどの関係を持っていました。Augusto は母方の叔父でしたが、二人は非常に近くに生まれました。子どもたちの生活においては、肩書きよりも、一緒に遊べるかどうか重要でした。できる限り、彼らはお互いの仲間を求めました。

Augusto は、遠い子供時代を思い出させる思い出を保存します。おもちゃを買うお金がなかった。カートの車輪が外に出ました

コルクと木材を使用し、手作業で作られています。まずおもちゃを作る必要がありました。そうしたら、床を歩いて横切ることができました。

思い出は厳粛なものばかりではありません。 Augusto は、両方の家で犬が引き起こした喧嘩について語っています。 1 匹の動物がもう 1 匹に噛みついたので、彼は Henrique に腹を立てました。今日、彼は犬がしたことについて少年には責任がなかったと認めています。友情は幼稚な憤りを乗り越えた。このエピソードはキャリアを説明するものではなく、運命を予測するものでもありません。それは、二人に単に少年であった権利を取り戻すのに役立ちます。



Henrique と Lucas が子供時代を過ごした地域を訪問 スペイン在住の祖父。

とても厳しかったと言われる先生の話もあります。 Augustoによると、Henriqueの父親はこの男性の家の近くで働いていたという。いつ学校に行くのかと尋ねられた少年は、誰と話しているのかも分からず、教師の残忍さの評判を理由に抵抗を表明した。正確な表現は失われています。少年の不都合な率直さの記憶が残った。

これが、子供時代から現在に至る過程です。継続的な撮影を通じてではなく、生存者がさまざまな理由で保管していた作品を通じて行われます。 Henriqueは家庭と仕事について話します。 Augusto はおもちゃ、犬、そして不都合な応答を取得します。これらの思い出は、タイトル以前に、子供が家族、風景、コミュニティの中に組み込まれたことを示しています。

その後、孫たちがその地域のことを知るようになると、物語の中では巨大に見えた場所の物理的な大きさも知ることになる。 Sofia は、祖父がどこで果物を採ったのか説明するのを聞くと、小さな家と大きな庭を思い出すでしょう。彼女にとって、その場所を訪れることは、ロサリオだけでは見られない部分を見つけることでした。

この家は細部まで無傷で残っていたため、重要なものではありませんでした。 Henrique が何度も彼女のところに戻ってきたため、それは残りました。いとこ Miguel Azevedo は旅行中に次のことを実感しました。たとえスペイン滞在時間が短くても、村を訪れることは滞在時間では測れない重要性があるということです。

彼が生まれた国について話すとき、医師はそれを要約しました。「彼はそこが故郷であると感じています。」同時に、スペイン人は彼をアルゼンチン人だとみなしているとも指摘する。この二重の経験にはちょっとした皮肉があります。彼が帰る場所も、彼を遠くから来た人として見るようになりました。

しかし、家は彼にこの分類を解決することを要求していません。それはメモリ内に残ります。

人生の二つの時期をつなぐ18日間

Augusto は、その旅立ちを道から眺めた一場面として覚えています。別れの場所と、遠くから Henrique を見送ったことを記憶しています。その後、知らせは手紙で届くようになりました。

残った人たちにとって、旅は不在として始まった。出発する少年にとって、それはまだ見たことのない場所の連続として始まりました。

Henrique 自身の記憶では、家族とともにスペインを離れたとき、彼は8歳でした。1950年の終わりにビーゴ港を経由したといえます。ルーゴ地方の少年は港町を知り、そこから海を渡る旅に出ました。航海は18日間続きました。

彼はイタリア船、さまざまな背景を持つ乗客、カナリア諸島 への寄港を覚えています。彼の記憶にある経路は スペイン から始まり、海を渡ってブエノスアイレス に着き、その後 ロサリオ へ向かいます。

少年は自分の小さな世界を離れ、さまざまな背景を持つ人々と一緒に暮らし始めました。この旅は、村にはない違いを彼に見せた。

両親の決断は命の可能性を求めた。家族の物語には、兵役を含む仕事や子供の将来への懸念が登場する。この決断を思い出すとき、子孫たちは、Henrique の両親の中に、向こう側の人生がどのようなものであるかまだ分からないまま、別の視点を探したいという意欲があることに気づきます。

アルゼンチンにはロサリオに親戚がいて、農業に関連した仕事の観点がありました。Henrique は、成功したキャリアを振り返ると思われるであろう、容易ではない始まりについて説明しています。支払わなければならない移住費用、わずかなお金、そしてすぐに予想通りの生活を提供できない仕事がありました。

彼の父親は大工でした。この知識により、彼はベンチャーやその他の機会を追求することができました。その後、彼はエントレ・リオス北部、Henriqueがコンコルディアとエントレ・リオスバイに関係する場所で働きに行きました。家族は道を実験してみました。ロサリオの登場によって、変更したり、試したり、調整したりする必要が完全に排除されたわけではありません。

母親は状況を確認するために エントレ・リオス まで行きました。Henriqueによれば、母親は8日後に戻ってきました。この短い試みは家族の物語に残りました。Henrique は ロサリオ に残り、学校の寄宿生として学びました。家族の計画は一直線には進みません。父親の仕事、母親の選択、息子の教育が共存できる方法を見つける必要がありました。

アルゼンチンで生まれた末っ子の Eduardo は、過去のこの部分を抵抗の遺産として解釈しています。彼にとって、移民が安らぎから始まることはめったにない。祖父母の努力が父親に伝わり、子供たちに伝わった。これは、横断を経験しなかったが、その結果を受け入れて生きた人の読書です。

これらの結果の中には、自分の道のために戦うという要求も含まれていました。勉強へのこだわりもありました。少年の将来を保証するのに十分な資金を持って到着しなかった家族は、学校を彼らの可能性の中心に置いた。

この時点で、決定的な主導権を握ったのは母親でした。

母親は一つの学校を知りましたが、満足せず、別の学校を探しました。希望した学校は有料でした。それでも、Henrique が無料で通える枠を確保しました。

船から教室へ、物語のスケールは変わります。交差点がかかってしまった



Henriqueの両親、家族が保管していた肖像画。

少年はアルゼンチンへ。学校は彼にそこで何をするかを選択する手段を与えるだろう。

学校のドア

Henriqueの記憶では、母親は国が変わった後だけ登場するわけではありません。彼女は行動します。学校を調べ、条件を評価し、学校を探し、子供がお金を払わずに勉強できるように手配します。

何年も経った今でも、彼はその取り組みの重要性を認識しています。息子は家族が経済的に余裕のない学校に入学しました。

Henrique はすでに スペイン で学び始めていました。ロサリオ では、その学校が彼の学齢期を形づくりました。父親が仕事で エントレ・リオスへ行った時期には、寄宿生としても暮らしました。彼にとって教育は機会と別離の両方に結びついていました。学ぶことは道を開く一方、両親の日常から離れることも意味しました。

幼い頃から準備ができていように見える医療の職業はありません。大工仕事を続ける可能性は家族の視野の一部でした。医学への興味に関する子供たちの記憶は、その職業についての学校での会話、医師の家族と関係のある同僚の存在、講義、人間の心への関心など、さまざまな刺激を示しています。それぞれが父親から聞いたことの一部を保管していました。

単一の起源がないため、選択がより認識しやすくなります。彼女は、与えられた機会の中で、人々やアイデアと触れ合う訓練を受けました。

Henrique は勉強し、試験を受け、一度は失敗し、探し続ける必要がありました。

彼は ラ・プラタ で医学を学びたいと考えていました。大学街 の学校には伝統があり、街には大きなスペイン人コミュニティもあったためです。試験センター で試験を受け、最終段階で不合格になったことを覚えています。

彼が思い描いた進路は開かれませんでした。

ブエノスアイレスに戻り、コルドバで医学部受験の可能性を見出しました。1962年の入学試験を思い出すと、順位を争ったことや、合格者の中から自分の名前を見つけたときの喜びなど、正確な記憶が残っています。それらは彼の記憶のワンシーンであり、あたかも機密リストがまだ彼の目の前にあるかのように保存されています。

その結果は前の結果を消去しません。リオでの不承認は、コルドバでの承認と同じストーリーに属します。後に学生、同僚、家族によって探求されることになる医師としての道も、密室から始まりました。

コルドバでは、クリニックとの連絡が彼の興味を引き起こしました。同氏によると、感染症はコース終了時に定義されたという。この選択は、病気をそれを理解するために必要な推論から切り離すものではありませんでした。数年後、彼の子孫は、観察し、仮説を立て、考えられる結論に至るまで思考をたどることの楽しさを彼の中に認識することになりました。

同じ専門分野に従うことになるAndréは、情報と人間の出会いに気を配る医師を描いています。試験は検査結果だけで始まるわけではありません。それは、聞いた話、見たときに何を認識したか、そして適切なタイミングで尋ねられた質問から始まります。この働き方は、息子が出来合いのものとして受け継いだものとして生まれたものではありません。Henriqueはそれを送信する前に、それを学習する必要がありました。

医学部での臨床実習と研修医としての研修によって、彼はブエノスアイレスへ移りました。1960年代の終わりには、すでに職業人としての生活を築き、Lúciaと二人の生活も築いていました。両親の選択に頼ってスペインから来た少年は、やがて他の人々にも影響する決断を下し始めました。

学校を単なる大学入学試験の準備として捉えてしまいがちです。しかし、この経験の根源となった母親の記憶は、もっと大きなことを示唆しています。彼の教育は個人の功績になる前に、家族の功績でした。

何年も経って、子供たちが父親から受けたものについて話すとき、その訓練が中心に現れるでしょう。彼は研究に資金を提供し、進路を奨励し、努力を要求しました。先代のあのしぐさが、形を変えて再び現れた。

少年は母親が開けるのを手伝ったドアから入った。大人は人生をかけて、他の人を同様の扉を開け、時にはあまりにも厳しく押し込みました。

パート II

仕事も家も

薬、*Lúcia*、子供との生活。



オフィスで家族に囲まれたHenrique。このイメージは、さまざまな世代と軌跡を結び付けます。

ケアすることを学び、教える ことを学ぶ

Henrique のキャリアは、最初からロサリオに根づいていたわけではありません。それ以前にはサンタフェで働き、リトラル地方の医学校の創設初期の授業に携わりました。招きを受け、2年契約を結び、最初の数期の学生たちと過ごしたことを覚えています。

この段階で長女Beatrizが誕生した。家族歴史において、この都市は教育経験の始まりと父親としての始まりを同時に示しています。 Lúcia と Henrique は、職業生活の構築を支援しながら家を建てました。

大学進学の場合は、他の可能性のある医療センターにアプローチする機会として浮上しました。 Henrique は、変化が 1971 年に起こったとします。Eduardo は、この選択について話すとき、父親が機会を認識する方法を知っていたと考えています。 ロサリオ との長いつながりとなるものは、考えられる道の間の決定として始まりました。

大学では、Henrique は結論に至る推論を学生に見えるようにする必要があります。

André にはこの方法の例が格納されています。病棟訪問中、父親はインターン、次に研修医、そして助手の話に耳を傾けた。そうして初めて彼は情報を収集し、推論を導くのに役立ちます。あまり知識のない人は、より詳しい人から答えを聞く前に話す場所がありました。

息子は、他の人たちを指導し始めて初めて、この手順の価値を完全に理解しました。それは官僚的な命令ではなかった。順番に聞くことで、各人が何を観察し、どこに疑問があり、どのように仮説が形成されたのかを確認することができました。それは学習者を見えなくすることなく教える方法でした。

Helena はこの位置で最初に Henrique と出会いました。彼はあなたの義父である前はあなたの医学教授でした。彼は自分のトレーニングを思い出すとき、ベッドサイドでの訪問を思い出します。理論的な授業だけでは提供できないものがありました。それは、聞く必要のあるストーリーとともに、特定の人への知識の伝達に同行することです。

親族関係はその後、Helena と Eduardo の結婚によって生まれました。治療は続けられた。彼女は彼を「医者 Henrique」と呼び続け、今では同じ男性を教師として、そして家族の一員として認識できる誰かのような親密さを持っています。タイトルは愛情を妨げるものではありませんでした。それは二人の間の物語の一部でした。

その後の世代は、この学校に通う別の方法を見つけることになるでしょう。Alice は何か月もかけてクエリをフォローアップしました。そこで祖父は彼に患者に注意を払う方法を教え、彼が観察したことを説明した。Claraも学生時代、祖父の入院に付き添った経験がある。彼らが幼い頃から知っていた権威は、助けを求めている人を前にしたとき、別の次元で現れました。

家族写真では、オフィスはこれらの関係をまとめます。Henriqueは子供たちと孫たちに囲まれてオフィスに現れます。Lucas も存在し、独自のパスがまだ開いています。画像はすべての人に同じ職業を約束する必要はありません。家族の歴史と仕事が出会う場所を示しています。

Henrique は、キャリアで最も価値があるものとして医師の育成を挙げます。彼の満足は学術的な成果だけにとどまりません。責任を持って患者を診て、調べ、判断することを学んだ人々にもあります。

この軌跡は正式に認められています。1999年に同大学の正教授に就任した。数年後の2012年、医学部は退職教授の一人として彼を表彰した。これらは彼の大学でのキャリアのマイルストーンであり、クリニックの終わりではありません。彼は働き続け、孫娘たちは彼から学び続けています。この連続性を測定する最も親密な方法は、おそらくほんの数歩離れたところにある、あなたの隣の André の部屋です。



オフィスのHenriqueとAndré。父と息子は感染症を共有しており、一緒に学び続ける可能性を共有しています。

まだ知られていないことに直面して

Eduardo は、食卓で医学の話を聞きながら育ちました。父親の一日を占めていた仕事の話は、ごく自然に家庭の会話へ入りました。そこには好奇心、推論、問いがあり、新しい病気が引き起こす不安もありました。

エイズが出現したことが彼の子供時代を特徴づけた。Henrique さんはその問題のケアと研究に携わっており、家族は彼の苦悩を理解してくれました。Eduardo は、父親が疲労の形でのみこの職業を持ち帰ったものとしては説明していません。たとえそれが難しいテーマであったとしても、彼が自分のやったことについて熱意を持って話したときのことを思い出してください。

この組み合わせは、Henrique が感染症学に携わった理由を理解する助けになります。未知のものを前に働くことは、恐れや疑いがないという意味ではありません。知識が変化し続ける中でも、答えを探し、人々に寄り添い続けるということでした。

2000 年代初頭、Henrique は大学で HIV とエイズの臨床研究に携わっていました。同大学は治療研究と病気の進行の観察に取り組んでいた。家族が語った軌跡には公的側面がある。家庭内での会話に医師が協力し、調査に協力したということだ。

この仕事は一人で成し遂げられたものではありません。それは、サービスを受けた人々に加えて、他の医師、研究者、看護専門家、さまざまな分野の専門家に依存していました。各メンバーの仕事は、支援を提供し、答えを探すことでした。

日帰り治療を行う病院での仕事が具体的な例です。Henrique は、感染症の患者に、より個別化された多職種による支援を提供しようとするサービスに参加しました。



のプレゼンテーションにおける Henrique 医療専門家。

チームは異なる経験を持ち寄り、長年の診療から学びました。ケアは多くの人々の仕事によって築かれていました。

そこで懸念されていたのが、
病院で滞在を過ごした
例：人々が去った後、どのように暮らしたか

そこから。継続には注意が必要です。治療が成功したからといって、必要な人の付き添いが不要になったわけではありません。

2004 年、再生紙ワークショップに HIV 患者が集まりました。Henrique はパイロットプロジェクトとエイズ臨床研究ユニットを調整しました。ワークショップの提案はチームの作業療法士によって考案され、実行されました。治療活動、共存、援助の間の出会いは、誰かを介護するために必要な仕事の多様性を示しています。このワークショップでは、治療に継続性と共存性を備えた活動が追加されました。

オフィスでは、これと同じ配慮を小規模で提供しています。André は、父親の話を聞き、患者を観察し、仮説を立てる能力を大切にしています。時々、隣の部屋から Henrique の相談の笑い声が聞こえてくる。息子にとって、この音は彼が賞賛する薬の一部です。出会いは、人をそこに導いた問題で終わるわけではありません。

質問があれば、André がドアを開けて助けを求めることができます。彼が医師をやめなかったのは、父親に電話できたからです。それどころか、彼は近くに考えてくれる人がいることの価値を知っています。共有された経験は成長し続けます。

「お父さん、ここに来て事件を見に来て、助けてください。」

André が覚えているこの要求は単純です。そこには数十年にわたる訓練と自信が込められています。父親に付き添って病院に行った少年は、彼がまだ学べることを認識できる同僚となった。

この環境での最初の思い出の 1 つは、空気の詰まったグローブです。André は体が小さく、入院中で、誰かが彼に膨らませたグローブを提供してくれました。医療行為に非常に一般的なものから作られたその物体は、その世界への入り口と関連付けられるようになりました。病院は怖いかもしれませんが、歓迎のジェスチャーが含まれる場合もあります。

その後、道路上のシーンでプロの選択が明らかになります。家族はマル・デ・ラス・パンパスに向かっていたが、北海岸で事故に遭遇した。André は10代でした。Henriqueは応援のために停車し、トラック運転手も参加して関係者の救援を行った。

André は、その事件のすべての動きを正確に覚えているとは主張しません。彼が抱いている確信はこれとは異なります。その日、彼は医学を勉強することを決心しました。父親の行動を見て、それまで会話や訪問、観察を通じて知っていた可能性が具体的になりました。

André は、自分が目撃したことと、そこから下した決断を守り続けました。立ち止まろうとする意欲は、創業時の出来事として彼の記憶に残るのに十分でした。

Henrique の薬も彼を行政に導いた。1993 年から 1996 年まで、彼は市の健康管理に参加しました。彼は、その誘いに躊躇し、その後、自分よりも特定のことを実行できる人々をまとめる方法を学んだことを覚えています。

それは相談とは異なる要件でした。チームでは、自分の能力の限界を知ることが仕事の一部です。誰を信頼するかを慎重に選択することは、どのように対応するかを知ることと同じくらい重要です。

家族にとって、この長い旅は、父親が彼の安全な避難所であるという André の繰り返しの表現に変換されます。それはすべての困難がなくなるからではなく、困難に直面したときに頼れる人が残るからです。

Lúcia、暮らしの中心に

Beatriz は、父親だけが登場する物語になれば必ず口を挟みます。父親について語るなら、Lúcia についても語ってほしいと求めます。

娘の記憶は、キャリアとともにある飾り的な存在ではない。それは、2 つの強い気質の関係の中で、人生の構築に参加し、家族を組織し、人々を歓迎し、自分の個性を維持した女性の姿です。

Beatrizによると、両親の関係はHenriqueが大学に通う前から始まった。彼は滞在中の1969年に結婚した。彼のプロとしての最初のステップ、サンタフェ としての活動、娘の誕生、そして ロサリオ への移行には、普通の生活が伴いました。続いてAndréとEduardoが登場しました。

Lúciaは、大きな決断にも、家事をこなす繰り返しの作業にも登場します。子どもたちはこのケアの恩恵を受けて成長しました。

André も彼女を大学教授として覚えています。この情報によって人物像がさらに広がります。Lúcia には仕事があり、妻や母親であることを超えた人生がありました。子どもたちはこの活動を、家の外にも興味と責任を持っていた女性と関連付けます。

ロサリオ とは家族の出身地が遠い Helena にとって、義理の両親を迎えることは具体的な重要性を持っていました。彼女は彼らが信頼できることを知っており、特に義母を強調しています。彼の記憶の中で、Lúcia は Lucas の世話、訪問、親族関係を支援に変えるジェスチャーに現れています。

孫がインフルエンザに罹ったときに飲んだスープは、「寛大さ」という言葉だけでは表せない何かを語っています。誰かが必要性を感じ、何かを準備し、そこにいたのです。ケアは、それ自体の重要性を宣言する必要なく、小さな行動によって家庭に入りました。

孫娘たちは、祖父母の家で寝ていること、歓迎されていること、会話していること、祖母と祈っていること、旅行していることなど、もう一つの場面を保存した。ビーチで二人は、少女たちの子供時代の一部となる季節を整理しました。Henrique はゲーム、海、物語の中にあります。Lúcia は、滞在を可能にした食事や存在など、これらの記憶の感情構造に参加しています。

Beatriz は、両親の間に存在した賞賛を認識します。摩擦も認識します。彼らは強い個性を持ち、すべてに同意するわけではない人たちでした。何十年も共有してきた人生は、違いがあったと認めても価値が下がるわけではありません。子どもたちが実際に体験したことに近づきます。

Henrique 自体は、ストーリーに難しい観察を追加します。後悔について考えるとき、彼は他の活動にエネルギーを費やし、時には家族のことを後回しにしてしまったことを思い出します。Lúcia について話すとき、彼女はおそらくそれがすべての夢を実現するのに役立たなかったのではないかと考えています。

Henrique の実現により、Lúcia にはなかった機会が共存する可能性があります。彼の感謝の言葉には、これまでに行われた選択の代償についての認識も含まれていました。関係の。

Lúcia さんの死は突然で、家族に大きな衝撃を与えました。Eduardo は、その瞬間に参加し、助けようとしたことの大変さを思い出します。医師の子供たちにとって、知識は母親を亡くした経験から身を守ることができませんでした。その経験は、すべての思い出の中で最も困難な思い出の一つでした。

Henrique にとって、その不在は家の広さの感じ方まで変えました。かつて二人の日常があった空間は、広すぎるように感じられるようになりました。しかし、それは後の章の話です。そこへ進む前に、Lúcia は自分自身の人生を生きた人として記憶されるべきです。



HenriqueとBeatriz。写真の中の父と娘 家族。

教師であり、母であり、祖母であり、強い個性を持つ女性。義理の娘を温かく迎え、スープを持って現れた人。そして彼女自身の夢にも、夫が以前より注意深く目を向けるようになった人でした。

Beatriz が残してほしいと願うのは、Lúcia のこの存在です。Lúcia の物語にも耳を傾けると、Henrique の物語はより真実に近づきます。

門を通して到着したお父さん

Henrique が家に入る前から、門の音が帰宅を知らせました。Eduardo は、テレビの前にいた3人きょうだいが、父親の到着に気づくと、それぞれ行き先を探したことを覚えています。末っ子の彼は Beatriz と André の様子を見て、二人についていきました。

この父親は要求した。私は努力、行動、責任を期待していました。彼の存在は家を再編成しました。

Eduardo はユーモアを交えて現場を伝えますが、厳しさを隠しません。彼は末っ子であるため、観察者の立場を与えられました。彼は自分の決断を下す前に、兄弟の間違いとその結果を理解していました。彼は、他の二人に何が起こったかだけでなく、父親の言葉からも多くのことを学びました。

最年長の Beatrizさんは、この前の裁判なしで自分のやり方で交渉しなければなりませんでした。彼女の父親は彼女を医師として診察したいと考えていました。彼女は農学から始め、その後歯科を選択しました。探求には摩擦、異なる期待、そして自分らしい職業を築く必要性が伴いました。

Bia は父親について語るとき、「ブラボー」という言葉を外しません。それは彼女を他の人に次ぐものにします。知的で、活気があり、寛大です。それらの間の近接性が重要です。寛大さによって需要が消えたわけではありません。その要求は彼を疲れさせることはなかった。

帰宅したときには、外食の提案が出ることもありました。Beatriz は、父親がその日に稼いだ分を家族と一緒に使おうと、子どもたちと選んだ良いレストランへ出かけた金曜日のことを覚えています。努力を求めた同じ人が、努力して得た喜びを分かち合うことも好んでいました。

思い出の中で、お金はさまざまな意味を持ちます。貯めることもでき、節約をめぐる冗談の種にもなる一方、教育費を払い、可能性を開き、人々を食卓に集めることもできました。子どもたちは、自分たちが受け取ったもののの中で、次のことが決定的だったと考えています。

学ぶ機会を得て、自分の人生を整えられたことです。

大人になってからの生活が計画どおりに進まなかったときも、その支えは続きました。Beatriz は、幼い娘二人を抱えて夫と別れた際、父親に助けられて家族の生活を立て直したと語ります。彼女が覚えているのは、一人きりにならずに再出発できたことです。

彼女はまた、丁寧にやり遂げられた仕事の中にも Henrique らしさを見いだします。患者を診る父親を見て、一人の人のためにそこにいて、できる限りのことをする姿勢を感じ取ります。そこでは、娘から父への愛情と、専門家としての彼への敬意が重なります。

André は別の形で医学に近づきました。子どものころから、父親の病院での回診について行きたがっていました。旅行や家族の用事の途中で Henrique が病院を訪れる必要があると、André は車を降りて一緒に中へ入りたがりました。感染症を専門に選んだことで、この近さは長く続く職業上の関係になりました。

努力が足りなかったわけではありません。André は、博士号を取得するよう主張し、自分の研究を見直す上で父親が重要な役割を果たしたと認めています。Lúciaがまだ生きていたとき、パンデミックの初期に実家から行われた弁護を思い出します。実家も学業成績を収めた。

Eduardoは泌尿器科を選択しました。特に幸せな瞬間を探しているとき、彼は大学の一般外科研修に合格したことを思い出します。それは彼自身の功績であり、それが父親に喜びをもたらす可能性があることも彼は知っていました。

しかし、末っ子は無批判な説明をしません。Henriqueは頑固で、間違いを認めたり、決定を変更したりすることが難しい可能性があると書かれています。時々、進路を変えることは弱さを意味するように思えました。Eduardoはこの硬さを認識しており、時間の経過とともに、特に孫が生まれた後は柔らかくなっていることに気づきました。

Eduardo 自身も、あまり心地よくない受け継ぎを自分の中に見つけます。旅行前に車のトランクへ荷物を詰めると、彼は緊張することがあります。スーツケースが斜めに置かれ、思いどおりに収まっていないだけで、自分の仕草に父親を見いだします。整理にこだわって旅の始まりを台無しにしないよう、自制しなければなりません。

Henriqueが弟子だった時期もありました。Eduardo は、父親との水泳のレッスンを思い出し、その後、テニスの経験を思い出します。男はそう

他の問題に直面しても安全だったが、彼は難しいストロークや下手な打球に対処する必要があった。テニスでは、彼は自分のミスにイライラし、プレーごとにそのフラストレーションを持ち続けることができました。

息子はこれらのシーンを面白がっています。なぜなら、これらのシーンは権限を侵害するものだからです。父親は試み、間違いを犯し、主張した。特にうまくいっていないときでも、彼は一緒にいました。

カウントが終了すると、Eduardo にショートメッセージが届きます。これだけ多くのエピソードを観てきたのだから、大がかりな追悼の言葉をまとめる必要はない。

「何事も見過ごされていないというメッセージだと思います。そして感謝しています。」

門、研究、旅行、料金、存在、何もかもが完全に注目されませんでした。後からやってくる感謝の気持ちは、子供の頃の従順さよりも多くのことを知っています。



診察室の Henrique と3人の子どもたち。家族として共に過ごす中から、歯科と医学でそれぞれの道が生まれました。

パートⅢ

思い出の家

マル・デ・ラス・パンパス、スペインと孫の世界。



マル・デ・ラス・パンパスの家、家族の思い出に。

マル・デ・ラス・パンパスの道

休暇の場所になる前、マル・デ・ラス・パンパス の家はまだ建設工事の最中でした。Eduardo は、建築資材を満載した車に家族全員で乗り、海岸へ向かったことを覚えています。大工だった祖父も時々同行しました。海はすでに楽しみを約束していましたが、ただのんびり過ごせるようになるまでには、まだ仕事がありました。

Henrique は、土地の購入を、ラファエラ の医学部との協力期間の終了時に受け取った和解金に関連付けています。予想外のお金が別の目的地、海岸沿いの家を見つけました。子どもたちの記憶では、この建設は 1980 年代初頭に遡ります。正確な日付は異なります。集合的な経験は明らかです。

資料を受け取ったり、作業を見守ったり、意見を出したり、ビーチを楽しんだりしました。薬の選択とともに遠ざかってしまったかに見えた大工の歴史は、祖父を通じて家族の生活に戻ってきた。ある世代の知識は、次の世代のプロジェクトにも依然として活かされています。

Beatriz は、後に一般的になる電話やテレビのない簡素な家を思い出させます。そこで時間は、その場にいた人々で満たされる必要がありました。雨が降った場合、家族は滞在しました。

Eduardo は、父親からの繰り返しの誘いを守ります。「靴を脱いで、ショートパンツを履いて、雨の中で出かけよう」というものです。その味を守り続けているという。家族に受け継がれてきたさまざまなものの中には、説明の必要のないものもあります。それらは体の中に残り、何年も経ってもまだ濡れることを受け入れます。

しかし、子どもたちが逃げようとした活動が一つありました。Henrique はハンモックに横たわって ガリシア詩選集 を開き、その場で最初に見つけた人を呼んで朗読を聞かせました。朗読には、望んだわけではない聴衆がいました。本とハンモックが登場すると、別の場所にいたい気持ちが強くなりました。

Eduardo は、父親は家を完成させたが、詩は最後まで読み終えなかった、と冗談を言います。これは家族の中での言い分で、Henrique ならきっと反論するでしょう。本人はこの作品を3回読んだと語っています。おかしみは、読む人と、呼ばれて聞かされる人との違いにあります。

こうして、祖父が読み聞かせた詩はもう一つの世代にも受け継がれましたが、いつもすぐに熱意をもって迎えられたわけではありません。Henrique 自身も、初読で夢中になったわけではありません。文章を難しいと感じ、読み続ける必要があり、後に注釈付きの版によって理解を深める方法を見つけました。

海の家では別の形式の会議も開催されました。André は、午後遅くに Henrique で波をキャッチしたことを覚えています。兄弟は、仕事や風景に限定されない、季節、友人、旅行のコレクションを作成しました。戻ってくるたびに、その場所に何かが加わりました。

孫娘が来たとき、マル・デ・ラス・パンパスは新しいサウンドとさらなるサイズを獲得しました。子ども週間中、祖父母は4人の女の子を海岸に連れて行った。旅は車内から始まり、会話、音楽、そして家族が数日間を過ごすために運ぶ必要のある物の量について考えました。

Sofia は、これらの時間の1つを、途中で流れた曲と関連付けます。Clara は満員の車と歌を覚えています。その道はただの家と家の間の隙間ではありませんでした。それはみんなが一緒にいた時間の一部でした。

浜辺では、おじいさんが水にびっくりするかもしれません。帰り道、足には砂が降り積もり、Clara が今でもその休暇を思い出させるパーベキューの匂いが漂っていました。の問題



Henriqueと孫娘の家族旅行。

砂は最終的に、足を洗うためのシャワーという実用的な解決策をもたらしました。家を小さな改造して、それを使った子供たちの記憶を運び始めました。

Elisa さんは、妹と一緒に祖父の肩に乗って、とても遠い海の一部へ行ったことを覚えています。彼らにとって、それはほとんど遠征でした。彼にとって、

水はまだ放置しておいてください。大人と子供の体の大きさの違いは、冒険にも差を生みました。

雨の日は室内でゲームをしていました。女の子たちは季節が変わるとチェスを忘れてしまったので、もう一度教える必要がありました。おじいさんは再び説明を始めた。教えるということは、常に一本の線で前進しているようには感じられません。会社を継続していくために、時には原点に戻ることもあります。

Claraは匂いとゲームを保管します。Elisaは上空から海を守ります。これらは、互いに置き換えることができない同じ場所の説明です。

スペインから来たいとこの Miguel Azevedo と Augusto にとっても、マル・デ・ラス・パンパス は歓迎的な経験になりました。かつて海を隔てて離れ離れになっていた家族がアルゼンチン側で再会することができた。この家は、同じ物語の別のバージョンを受け入れることができました。

興味深いことに、最も心安らく場所を尋ねられた Henrique は、スペインにある祖父の家を選びます。子どもや孫たちにとって、海辺の家は、彼自身が考える以上に大きな位置を占めています。その違いは、家が持つ力を示しています。迎え入れられた人の記憶の中で、持ち主が気づく以上に大切な場所になり得るのです。

スペイン、再び

家族が最初に気づく変化は、たいてい話し方です。Henrique は スペインに着いて親族と会うと、口調がその土地に近づいていきます。子どもたちはそれを笑いながら話し、孫娘たちは彼がそこで見せる喜びを感じ取ります。

いとこの Miguel Azevedo は、そこに少し違う見方を加えます。Henrique がスペイン人の役を演じているとは考えていません。海の両側に本物の彼がいると見ています。イントネーションの変化には、長いあいだ離れていても続いている親族との暮らしや交流が表れています。

Eduardo は、自分がアルゼンチン人だとはっきり言いながら、このつながりにも自分を重ねます。その二つは同じ答えの中に共存します。子どもたちがスペイン国籍の意味をまだ十分に理解していなかったころ、父親が取得の手続きをしてくれたことを覚えています。スペイン が多くの人の会話でよく語られる旅先になるずっと前から、そこには訪ねるべきいところ、叔父や叔母、祖父母がいました。

旅の地理は、人とのつながりによって形づくられていました。ルーゴと家族の故郷は、旅程にある興味深い場所というだけではありません。そこには彼らを待つ人がいて、Henrique は、子どもたちがアルゼンチンで知る暮らしより前に何があったのかを見せることができました。

彼は家や村、果物を摘んだ場所を案内しました。Clara は祖父がミカンを採り、物語を聞かせてくれたことを覚えています。Sofia は、彼が子ども時代の家と庭を紹介するときの感情に気づきました。孫娘たちは一人の少年について聞いてきましたが、その場所に立つことで、その少年と自分たちと歩く男性を近づけて考えられるようになりました。

Lucas もそうした帰郷に加わりました。一枚の写真には、Henrique が育った地域の家と緑のあいだに立つ祖父と孫が一緒に写っています。

Augusto は満足度を説明します。ワインを試飲するときの甥の様子 生産された。もっと一般的なラベルがあるかもしれません。知られています。Henrique が興味を持った 家族の誰かが作ったワイン。

味には縁があった ション。

おじさんは食事や料理も覚えています。チャンファナなどの地域の。訪問テーブル、会話、病院の前を通り過ぎました 返されるようなもの。旅行したとき アルゼンチンへ、Augusto は渡さないことを心配していました 仕事。Henrique は彼を家に迎えました、彼にさせてください 彼を安心させ、リソースを提供した 滞在を楽しんだことを。



Henrique 旅に、ワインとともに。

「私のホテルは Henrique の家にあります」と Augusto は要約し、到着できるとわかっている人の自信を持ってこの考えを繰り返しました。

孫娘たちとともに、スペインには、Henriqueの希望する道からの逸脱も含まれていました。Elisa は、雪を期待していたのに氷を見つけた シエラ・ネバダ への旅行を思い出します。女の子たちは転んで楽しんでいましたが、彼は心配していた。祖父は、ルーゴ とア・コルーニャにいる家族の近くにいることを好み、家族に同行するために山へ行っていました。

Clara は、人生初の雪の記憶を保持しています。彼は祖父母の部屋で寝ることを選び、祖父母と一緒に目覚めたとき、窓の外に雪が見えました。彼女はまた、Henrique がいとこのために同様の帽子、手袋、スカーフのセットを用意した旅行のことも思い出しました。彼らを連れて行くだけでは十分ではありませんでした。彼は何をを使う必要があるかを考えました。

ガリシアの伝統音楽 は、Henrique に戻る別の方法を提供します。彼は歌っていた家族、その声を尊敬していた叔母、そしてこの音楽への愛情を覚えていた。彼の好みの中で、彼はかもめについて言及しています。子どもたちはまた、この家をガリシアの伝統音楽歌手の声と結びつけます。

Helena さんは、Lúcia さんは、ガリシアの伝統音楽を聴きながら目覚めたとき、より内省的な一日を過ごしたと認識していると述べています。その音楽は、彼の生き方を知る人たちにはよく知られた曲だった。

スペインは、レコード、Augusto との会話、ワインのテーブル、アクセント、または孫に見せる庭の中にある可能性があります。また、短期間の訪問を急いでせずに、ルーゴ で長いシーズンを過ごすという、まだ実現していない計画になる可能性もあります。

非常に多くの人の行き来を経て、この国は単なる歴史になったわけではありません。未来への可能性を提供し続けました。



スペインの栈橋での午後遅く。



スペインのHenriqueおよびLucas。旅行は孫を祖父の歴史と愛情に近づけます。

孫たちが知っていること

お気に入りの孫娘の候補者は少なくとも 4 人います。 Henrique はこの論争について知っても、何の驚きも見せませんでした。彼は誰に対しても同じことを言ったことを認め、その結果を面白がっています。

「彼らが信じているよりも悪いですね？」

Clara、Alice、Elisa、および Sofia には、自分たちの立場を支持する独自の理由があります。誰もが、彼女と一緒に特別な状況を生きた祖父を知っています。このゲームがうまくいくのは、たとえ祖父のレパートリーが繰り返されたとしても、受けた注目は個人的なものであるように見えるからである。

最年長の Clara は Henrique の名付け子でもあります。祖父との物語には、旅、誕生日、病院での学び、祖父母の家に泊まった夜があります。15歳のとき、バンクーバー への旅行を贈られました。当初は Clara と Henrique の二人だけで行く予定でしたが、最終的には彼女の父親と妹も加わりました。たくさん歩き、観光し、笑ったことを覚えています。その街は、彼らと一緒に過ごした経験と結びつきました。

最近の生活では、計画通りに外出することもできました。クラブハウスを訪れた Henriqueさんと孫娘たちは、スピリチュアルについての講演を期待していました。彼らは、ダンス、ミラーゲーム、参加者間のハグなどのアクティビティを見つけました。

彼はその提案に参加した。女の子たちは、期待とは違うことを自分に許した祖父と一緒に笑いました。その後、彼らはスープを食べに行きました。

Clara と Sofia は、このエピソードを共有の思い出として数えています。それを特別なものにしたのは、一緒に経験した驚きです。

Alice は冗談も迷惑な部分も知っています。転ぶと祖父から拍手と「よくやった」と褒められることもあった。子供の頃、それは彼女を悩ませました。そう言いながら彼は笑います。時間の経過により、彼との関係は変化した

彼女がいつもそれを面白いと感じていたのは言うまでもありません。

Alice は Henrique を、新聞の匂い、家族の家々、そして祖父の診療に付き添った経験とも結びつけます。3か月にわたって診察を見学し、医師という職業に近づきながら祖父へ質問する機会を得ました。遠くから懂れていた知識が、手順、注意深さ、推論として具体的になりました。

彼の双子の妹であるElisaは、祖父を海、チェス、旅行から守っています。孫たちと一緒にいる中で彼がどのように変化するかに注目してください。彼らの思い出には楽しさと思いやりが組み合わされています。冒険を追う大人も氷から落ちるのではないかと心配します。

Sofia は、入学試験の前に幸運を祈るために電話をかけ、その後はどうだったかを尋ねてくれた祖父のことを話しています。承認を祝うことだけが目的ではなかったすべてが解決したとき。彼は、まだ検査が行われ、結果が期待される時期に、不確実な間隔で現れました。

彼女はまた、濾過されていないユーモア、つまり彼自身が面白いと思うコメントにも気づいています。同じ男性の優しさと儀礼の欠如を認識します。4人の女の子には、敬意を表するために準備されていない習慣やフレーズを持ったフレンドリーな祖父がいます。

これらの話が語られたとき、4人は医学を勉強していました。この偶然は家族の誇りを呼び覚ますが、それぞれが自分の力で道を渡っています。

最年少の孫である Lucas は別の方向を指しています。彼は精密科学が好きで、工学を考えています。Henrique さんはこの関心を認識しており、過度の推測は避け、親や他の人からの指導の余地を残していると述べています。



ソファで社交的な夜。写真には、家で寝ていたことについての家族の碑文が保存されています おじいちゃんから。

家族の人たち。異なる未来の可能性も、それが提供できるものの一部です。

Lucas さんは祖父と一緒に農場ツアーを続けています。彼らは果物を摘んだり、ジャボチカバを観察したり、鶏にトウモロコシを与えたり、途中でおしゃべりしたりしました。彼はこの会社を自然への関心やスペインの古い友情の物語と結びつけています。

一緒に暮らすことで、孫は友達が生まれた時代だけに属しているわけではないことを知ることになる。それらは探し出され、記憶され、受け入れられ続ける必要があります。Henrique は、Lucas が生まれるずっと前から始まった絆を維持しており、少年はそれらがまだ動いているのを見ることができます。

家族が集まっても、好みの違いはなくなりません。Alice は父親の影響で Unión del Parque を応援し、Atlético del Litoral のファンである祖父を冗談でからかいます。チームの対抗意識も、家族の愛情の中に収まっています。

写真では、オフィス、ソファ、レストラン、旅行先などに登場します。ソファで過ごす夜、オフィスでの会議、旅行、ゲーム中に挙手することもあります。このコレクションは、すべての画像が特別な機会であるという要件を放棄しています。

結局、孫たちは彼が普段の一日をどう過ごすかを知っています。何を好んで食べ、どう笑い、どんなことを言い、誰に電話するのが好きかを知っています。この親密さは経歴書には収まりません。繰り返し一緒に過ごすことで築かれた理解です。

だからこそ、誰もが自分を特別だと考える議論を持っているのです。祖父はその言葉を繰り返した。共同生活は各人に自分だけの思い出を与えました。

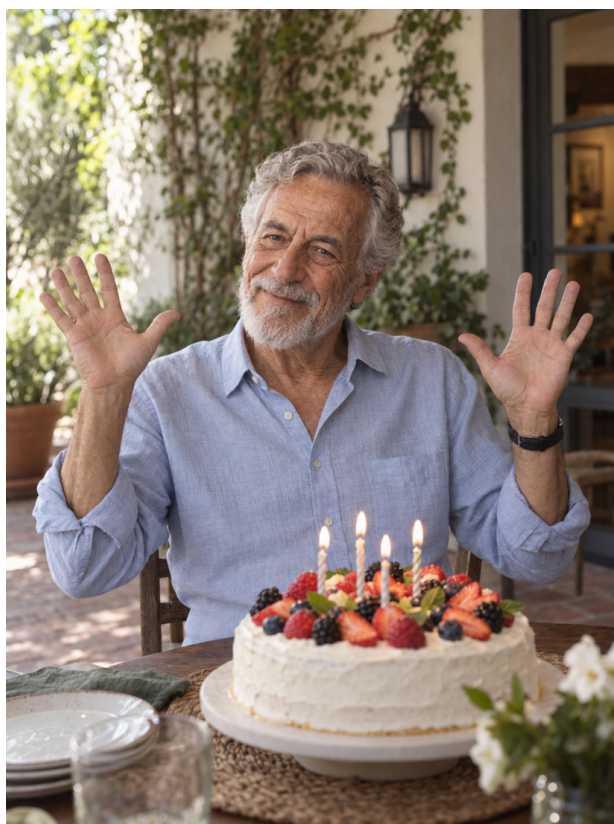


Henrique と 4 人の孫娘がオフィスにいる。当時、彼らは皆医学を勉強していました。

パート IV

まだ明日がある

不在、新たなスタート、平凡な日々。



Henrique 家族のお祝いに、家族が保管していたジェスチャーで。

家の大きさが変わったとき

Lúcia の死後、家は大きすぎるように思えました。 Henrique は、ベッド半分、テレビの部屋、オフィスなど、ほんの数箇所に収まるかのように、そこに残った生活を描写しています。

家の間取りは変わっていませんでした。そこに住む方法、そうです。彼を指導し決定する能力のある人物として知っていた人々も、彼の弱さを目にしていました。 Clara によると、家族は祖父の家で寝て、非常に親密な期間を過ごしたという。時々私は彼の部屋に行き、彼が大丈夫かどうかを確認しました。その時、彼が泣いているのを見た、彼の記憶の中では珍しい光景だった。

Elisa は家族が静かに集まっていたことを覚えています。 Alice は母親が彼のために用意してくれた夕食のことを思い出します。それらは、損失を解決できるフレーズを見つけるという意図を持たずに、アプローチの異なるジェスチャーです。

Henrique と Lúcia は何年もの間、子供や孫の世話をしてきました。さて、若い人たちは近くにいる方法を探していました。関係は完全に逆転したわけではありません。可能性を加えた。日頃から支援を申し出ている人も支援を受けることができる。

子供たちにとって、Lúciaを失うことは、母親の不在に対処し、母親の前で父親に同行することを意味しました。 Eduardoは感情を隠すことなく、その瞬間のつらさを語る。 Beatriz は、母親が家族の中で受けてきたものと、母親の死が全員に与えた影響を認識しようとしています。

Henrique が振り返って見つけるのは、功績だけではありません。別の配分をしたかったと思う時間も見つめています。 Lúcia の夢について考えることは、すべてが公正で十分だったと求めずに、自分の歴史を見直す力の表れです。



家族の集まりに参加したHenriqueと孫娘たち。

これらはどれも、遅ればせながらの説明では解決できません。しかし、それは残りの時間に対する注目を変える可能性があります。この認識は、より広い意味での生活に戻るといふ決定とともに現れます。

一人で過ごした時期の後、Henrique は人生を立て直すことにしました。彼の言い方にはユーモアがあります。「新しい経営陣のもとで」。これは、すぐに幸せになるという宣言ではありません。

大きな家のわずかな場所だけで暮らし続けたくないという思いを、彼はこう表現しました。

新しい関係がこの段階に入りました。家族は会社について、そして会社を持つことで得られるメリットについて話します。いどこである Miguel Azevedo は慎重に配合されています。誰も代わりにならないのです。愛は違います。新しい存在の価値は、Lúcia のメモリと競合する必要はありません。

医者もまた夢の話をした。スペイン、特にルーゴでシーズンを過ごしたいと思っています。彼のパートナーである Teresa は旅行が好きで、計画を共有することができます。今のところ、これらはプロジェクトであり、すでに実施された旅行ではありません。未来はまず会話として再現されます。

Helena はテーブルに至るまでの変化に気づきます。長い間、彼は義父がクリームやリゾットを使った特定の調理品を断固として拒否していたことを連想していました。それから彼女は彼がそれらを食べるのを見ました。その詳細を知ると、彼女は家庭内での確信を再考することになる。彼も変わるのだ。

この出来事のおかしみは、身近で見守られた変化にあります。家族が時の流れを感じるのは、大きな決断のときだけではありません。その人が、皆が繰り返していた好みの一覧に当てはまらなくなったときにも気づきます。

彼の孫娘たちは今でも彼の人生の一部です。友達が続々と集まってきます。オフィスは仕事と交流の場であり続けます。Henrique は、子供や孫に元気に会えること、幸せになる可能性を取り戻すこと、後に残された欲望を再び取り戻すことの満足感について語ります。

再び ルーゴ に目を向けた彼は、記憶の中で Lúcia を連れ続けていました。そして、次のような人生でも計画を立てることを学びました。

Lúcia がもう身体的にはそこにいない人生です。

そして、家は少しずつ、まだ住めるものの唯一の尺度ではなくなりました。

続く日々は

木曜日には友達に会える見込みです。 Clara は、クラブのレストランでの祖父の日常、つまりテーブル、仲間、ワインについて知ることになります。 Eduardo と Helena も、この永続的な取り組みを認識しています。

かつては彼の子供たちの社会生活にとって非常に重要だったクラブが、ますます彼の居場所になっていきました。 Eduardoは変化に気づきました。若い頃、彼は常にクラブハウスを訪れ、そこで友達を作り、それを維持しました。さて、特定の段階では、父親のほうにより関与するようになります。

ワインに対する熱意をそれほど共有していない Eduardo にとって、この飲み物はこの機会に何よりも価値があります。彼はその場所と、一緒にボトルを開ける人々が好きです。この観察はまた、父親の喜びの一部を説明しています。つまり、出会いはラベルを超えて存在します。

Atlético del Litoral は、このルーチンをはるかに長い間実行してきました。 Henrique さんは高校生の頃に田舎に行ったときのことを思い出します。クラブとの関係は、子供たちとの散歩、ナイターマッチ、アイスクリーム、ポップコーン、スタジアムまでの散歩にまで及びました。

Eduardo さんは、父親が会社を出て作業着を着て試合に行っていたことを覚えています。小さいAndréは、後のゲーム中に時々眠ってしまうことがありました。たとえその部屋の一部で眠ったとしても、彼は去ったという記憶を持ち続けた。

子どもたちのユーモアには、共通の敗北も含まれます。会社にとって結果よりも経験の方が価値がある夜がたくさんありました。他の愛情の場所と同様に、クラブに所属することは、喜びを単純に説明することに抵抗します。

Atlético del Litoral の優勝を見届けたことを語るとき、その感動の背景には最近の出来事があります。2025年の地域選手権での優勝です。

家族はその結果に、順位表には表れない時間の長さを加えます。それは、何年も一緒に応援してきた人々の待ち時間です。

皆で分かち合う喜びがある一方で、もっと静かな楽しみもあります。ガリシアの伝統音楽を聴くこと、本を読むこと、語り合うこと、スペインに帰ることです。Henrique はそれらを完了済みの一覧として語りません。今も、これからしたいことを考えています。

ガリシア詩選集 を振り返るとき、彼は読み方が変わっていった過程を語ります。最初は難しさがあり、その後、別の近づき方が生まれました。注釈付きの版が、この詩を好きになる助けになりました。クラブの敷地で木陰に座って読んだ記憶は、スペインの本が彼の アルゼンチン での人生の風景にも根づいたことを示しています。

祖父から受け取った贈り物は、その後も変化し続けました。最初からすべてを理解する必要はありませんでした。時間もまた、読者が本にもたらすものの一つです。

もう一度体験したいことを尋ねられた Beatriz は、特別な出来事を選ぶ必要がありません。普通の日々が好きだと答えます。日常の中に父親がいて、働く喜びや人と過ごす喜びを感じている姿を思い浮かべます。

その願いは、家族が敬意を表すときに何を求めているのかを測る助けになります。物語を残すことは、物語を終わらせることではありません。まだ電話をかけ、訪ね、食卓を囲み、すでに聞いたことがあるかもしれない話をもう一度聞けるうちに、注意を向けることです。



Henrique と家族でお祝いに。

Helena は自分のメッセージを録音しながら、そのことを感じます。別れの言葉のようになりそうな雰囲気に対し、もっと顔を見せてほしいと義父を誘います。そして、とても具体的なお願いを添えます。自分のガリシアのワインが切れたので、一本持ってきてほしい、と。

未来を出会いのスケールに戻すこのフレーズ。先のことを考えるために何十年も計画する必要はありません。場合によっては、次回の訪問だけで済むこともあります。

Henrique は、子供たち、孫娘、孫のこと、学んだこと、そして今も望んでいることについて語ります。女の子の間で均等に分配された好みを笑うことを受け入れます。彼は失ったものを除外することなく幸福について語ります。会話は終わりますが、彼の一日はそれで終わりません。

「今から仕事に行きます。」

後から来る人のために

Henrique は両親から学ぶ機会を、祖父から一冊の本と時間についての教えを受け取りました。Lúcia とともに家族を築きました。彼女を思い返すとき、その共同生活における彼女の働き、願い、選択を認めています。

その後、ほかの人々が続きました。患者の見方を学んだ学生たち。自分の職業を探した子どもたち。彼の仕事を知りたがった孫娘たち。理系分野を好みながら、会話や散歩の中に祖父を連れている孫。アルゼンチン 側にも変わらず家を見いだしたスペインの親族たちです。

継続性にはコピーは必要ありません。 Beatrizさんは、父親から大切なものを受け取るために医師になる必要はありませんでした。 Eduardo は、遺伝した頑固さを認識し、物事を違う方法で行おうとすることができます。 Lucas は別のクラフトを選択できます。生徒は、教えてくれた人の意見をすべて繰り返すことなく、聞く方法を実行できます。

おそらく、これが植栽の最も寛大な部分です。成長するすべてのものを制御しないということです。

オフィスでの家族写真撮影は、これらの生活を結び付けます。それぞれの人の記憶の中に、その親密さに意味を与えた仕事、要求、遊び、出会いが現れます。

Augustoにとっても、彼は去った少年のままです。 Andréの場合は隣です。 Biaの場合、それは追体験する価値のある平凡な一日にフィットします。孫娘たちにとって、彼はそれぞれに自分たちが特別な場所を占めていると信じ込ませる男だ。彼自身は、まだ ルーゴ について夢を見ることができる人です。

祖父の松の木は成長するまでに数十年かかりました。 Henrique が人々に残す物語にも、独自の時間があります。

時間の中の人生

- 1942 始まりはスペイン。Henriqueは、ルーゴに近い田舎で、親戚、土地、水、肉体労働に囲まれて生まれました。
- 1950年末から 1950年 海を渡る旅。8歳で スペイン を離れ、ビーゴ を経て、船
代初め で18日間旅しました。家族は ロサリオ に定住し、学校
が彼の学齢期を形づくりしました。
- 1962 コルドバの薬。医学部に入学する。研究と臨床経験が感
染症の選択の指針となります。
- 1960年代後半 修行と結婚。卒業後はブエノスアイレスでレジデントを
行う。1969年にLúciaと結婚。
- 1971年以前 サンタフェ。医学を教えた約2年間。その時期に長女
Beatriz が生まれました。
- 1971 大学とロサリオ。 Henrique は大学に進学し、教師およ
び研究者としてのキャリアを築きます。
- 年の始まり 1980 マル・デ・ラス・パンパス。家族はビーチハウスの建設
に参加し、今後数十年にわたって集会の場となる。
- 1993年から1996年 公衆衛生。自治体の健康管理に参加し、さまざまな分野
の専門家を結集する方法を学びましょう。
- 1999 完全な教授。彼は長年にわたる教育、研究、支援を経て
その職に就きました。
- 2002年から2018年ま 研究と支援。 HIV とエイズ、治療への取り組み、日帰り
で 病院ケア、チームワークに関する長年の研究。

2012 大学退職。彼は大学から退職教師の中で表彰されています。事務所は続けます。

2025 **Atlético del Litoral** の喜び。クラブが地域選手権で優勝し、その祝福が家族で応援してきた数十年の歴史に加わりました。

83歳 継続性。 Henrique は、練習、友人、孫について、そしてルーゴで時間を過ごしたいという願望について語ります。

家族の声

Henrique と Lúcia はこのファミリーの中心です。Lúcia の存在は、彼女と一緒に住んでいた人々の記憶を通して現れます。

長女のBeatriz、またはBiaは歯科の道を志しました。彼女は双子 Alice と Elisa の母親です。彼の思い出には、Lúcia の強さ、父と娘の違い、そして自分の人生を再構築する際に受けたサポートが含まれています。

次男のAndréは感染症専門医になりました。ClaraとSofiaの父親です。彼の思い出は、病院の近くで過ごした子供時代、医学を学ぶ決意、そして職業上の父親との親密な関係を思い出させます。

最年少のEduardoは泌尿器科医です。彼の妻、Helena は、義父として彼を迎える前に、教師として Henrique と出会いました。二人はLucasの親です。彼らの声は、ユーモア、感謝、歓迎、そして長年にわたる変化を追う経験を加えます。

Clara、Alice、Elisa、およびSofiaは、報告された期間に医学を勉強していました。Lucasはエンジニアリングを考慮しました。これらの話が語られたときのみんなの勉強や計画はこんな感じでした。

Henrique の母方の叔父でほぼ同い年の Augusto Azevedo は、スペインでの幼少期と別れの思い出を大切にしています。彼の息子、Miguel Azevedo は Henrique のいとこであり、スペインとアルゼンチンの再会の証人です。

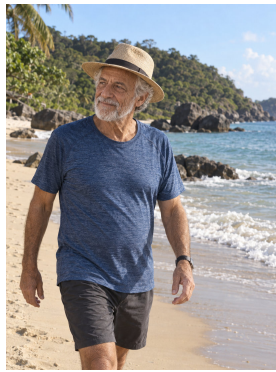
家族のアルバム

Henrique とそのストーリーに関わる人々の写真。













この版

ドクター Henrique

Henrique 医師: 医療と家族に捧げる人生。デモ版、9 月 2026.

実話に基づいてQamaniで作成された伝記の翻案。架空のキャラクターと AI が生成した画像。

ダイアログを適応させました。タイポグラフィーDroid Sans Fallback / Charis SIL。フォーマット 18 × 25 cm。

これらの思い出を伝え、保存し、共有してくれたすべての人々に。

